

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04231

研究課題名(和文) 自閉症児の授業づくりにおける教育目標・教育評価に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Educational Objectives and Evaluation in Designing Lessons for Children with Autism.

研究代表者

三木 裕和 (MIKI, hirokazu)

鳥取大学・地域学部・教授

研究者番号：80622513

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)： 研究の目的は、自閉症、発達障害の教育実践における教育目標・教育評価の構造を明らかにすることであった。学校教員と大学研究者の合同研究会を、のべ18日間に渡って行い、数多くの授業実践を検討した。その結果、社会性の障害に対して、社会適応行動の獲得が重視される傾向にあるが、文化、科学の伝達、習得をめざした教材、授業が可能であることが明らかになった。また、人と共感すること、創造的に考えることを教育目標とした授業も多く見られた。強度行動障害については、自閉症の障害特性に応じた環境が推奨されているが、学校教育全般における、共感的情動体験の蓄積がより有効であると推察された。

研究成果の概要(英文)： The aim of this study is to build up the structure of educational objectives and evaluation for implementing lessons to children with autism. For as many as eighteen days, we had joint meetings of school teachers and researchers where we discussed diverse examples of lesson practices. Throughout these meetings, while in the lessons for those children with social disorders, we tended to focus on the acquisition of social adaptive behaviors, we found it possible to use teaching materials encouraging them to learn culture. It was also noticeable that there were many practices whose educational objectives promoted those children to have the ability to sympathize with people and think creatively. For those children with severe behavior disorders, it is generally recommended to provide them with an environment appropriate for autistic-oriented children, but we found that it was more effective to offer in school education many opportunities to accumulate experiences of sympathetic emotions.

研究分野：障害児教育学

キーワード：教育目標 教育評価 自閉症 発達障害 授業づくり 教材 行動障害

1. 研究開始当初の背景

(1) 目標準拠評価と障害児教育

障害児教育においては、目標準拠評価を進めようとする傾向が顕著であった。2010年、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会が「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」を報告したことを受け、文部科学省初等中等局長は「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善などについて」を通知した。その中で、「障害のある児童生徒の学習評価の考え方は、障害のない児童生徒と基本的に変わらないが、個々人の学習状況を一層丁寧に把握し、特別支援学校では個別の指導計画の作成が義務づけられたので、その計画に基づく学習状況や学習結果の評価を行う」とし、目標準拠評価のいっその推進を提起している。

しかし、障害児の場合、障害や発達の実態が多様であることから、教育目標を示すとされる学習指導要領をそのまま教育目標とすることができず、特別支援学校では、個別の指導計画の作成や、単元および授業計画を作成するにあたり、個別具体的に教育目標を設定する必要に迫られる。しかし、その際、教育目標を行動的用語によって表現し、分析的、要素的行動に還元したうえで、その習得状況を細かく確認するという傾向に陥りやすい。

自閉症を中心とした発達障害児(以下、自閉症、もしくは自閉症児と略する)の教育においては、この傾向は特に顕著に見られる。

社会性の障害である自閉症は、社会的な不適応行動が課題として意識されやすく、行動変容のみが教育目標に掲げられる傾向にある。教師や児童生徒との共感的人間関係の形成や、授業において文化を教授し、教材に働きかけることで自らを変革するという教育的価値が背景に追いやられている。

「(教育) 目標を行動目標として、『児童生徒の行動の変化を第三者に具体的に伝達できる』というように、行動的に記述する。言い換えると、どのような行動を取り上げるかを明記して、第三者が目標の達成を評価できるようにする」とする研究も見られる。(京都市立西養護学校、東養護学校、呉竹養護学校、白河養護学校、2003年、「総合制・地域制の下での養護学校における教育課程はどうあるべきか～障害種別の枠をこえた教育課程のあり方に関する基礎研究～」、文部科学省教育研究開発学校3年次報告)

(2) 知的活動、情意的活動の価値

このような「評価目標を行動的用語によって表現しようという発想、すなわち行動目標の設定という考え」について、梶田勲一氏は次のように述べている。「具体的には評価の基準をだれでもが客観的に観察しうる外的行動の形で表現し、操作的客観的な形での評価を可能にしようという・・・(中略)このような考え方に対しては、客観テストに対す

る場合と同様の批判を受けることが多い。たとえば、このような形で表現しうる目標とは個別的な知識や技能にかかわるものでしかなく、教育目標の中核的部分である高次の知的能力とか情意的特性などが結果として無視されることになる、といった批判である」(梶田勲一、1992年、『教育評価(第2版)』、有斐閣双書)

梶田氏の指摘に従えば、評価目標を行動的用語で表現し、分析的、要素的行動に還元したうえで、その習得状況を細かく確認するという傾向する傾向は、児童生徒の知的活動、情意的活動を軽視、ないし無視することにつながり、教育実践を創造的に発展させる上で大きな支障を来すものと言える。

教育の過程は本来的に、児童生徒が、教育的人間関係のもとで、自然や社会、文化を媒介とした教育活動を受け止め、それに主体的に関わることを通して、自分を新しく創造していくものである。この教授-学習過程は児童生徒の知的活動、情意的活動が総体として内的連関のもとに働くものであり、児童生徒がそこで何を(教育内容)学び取るかが問われるものであって、行動目標の偏重は、教育目標が教育的価値と無関係に設定される危険をはらんでいる。

(3) 自閉症教育における教育目標・教育評価の研究課題

われわれは、障害児教育における教育目標・教育評価を検討する際、特に自閉症児、重症児に着目する必要があると考えてきた。重症児の場合、その発達的变化は微細であり、目標-評価論を実証的に成立させることには困難があるが、本共同研究者たちは、平成24年度から、公開研究会、実践検討会などを継続的に行い、重症児の教育目標・評価論に関して、出版などでその研究成果を公表してきた。

教育目標、教育評価の課題は、障害児教育全般を象徴するものであり、教育評価の基準を何に求めるかという教育評価観の論争的課題として学術的検討が求められている。前述の通り、発達障害の教育では測定主義的、行動主義的な教育目標論、評価論が根強くあることから、これまでの研究成果をもとに、研究対象の障害カテゴリーを、自閉症を中心とした発達障害に設定した。

2. 研究の目的

研究の目的は以下の三点であった。

(1) 自閉症児を中心とした発達障害児の教育実践における教育目標・教育評価の構造を明らかにすること。その際、「人と共鳴し共感すること」「創造的に考えること」の内容と方法に研究の視点を置く。(2) 社会性の障害に対して「社会適応的行動の獲得」だけでなく、社会性そのものの発達を教育目標として設定可能であるかどうかについて研究の視点を置く。(3) 特別支援学校における個別の教育支援

計画、個別の指導計画、年間指導計画、成績表、通知表などを分析検討する。

3. 研究の方法

共同研究体制のもとで、上記の研究課題に取り組んだ。本研究を遂行するための研究期間は3年とした。

(1)初年度 (2015年度)

第1回研究会、7月11日、12日、内藤綾子(鳥取市こども発達家庭支援センター)「絵本の読み聞かせからまなぶもの」、河合隆平(金沢大学)「『障害のある子どもの教育目標・教育評価-重症児を中心に』への論評」、篠崎詩織(奈良教育大学附属小学校)「特別支援学級の授業づくりから①」、大島悦子(大阪市立高倉小学校)「特別支援学級の授業づくりから②」

第2回研究会、11月7日、8日、越野和之(奈良教育大学)「基調提案」、川地亜弥子(神戸大学)「通常学級における教育的評価」、石田誠(京都府立与謝の海支援学校)「教育実践と目標評価①」、木澤愛子(滋賀県立甲良養護学校)「教育実践と目標評価②」、寺川志奈子(鳥取大学)「子どもの『ねがい-自閉症と自我』」

第3回(公開研究会、鳥取大学80名参加)、越野和之、篠崎詩織、岡野さえ子(山口県立萩総合支援学校)による報告と討論。

(2)2年度 (2016年度)

第1回研究会、7月17日、18日。越野和之「基調報告」、内藤綾子「就学前療育機関における発達診断」、三木裕和「強度行動障害と自閉症教育：現代の流行を探る」、塚田直也(久里浜特別支援学校)「幼稚部における自閉症児の発達診断」、赤木和重(神戸大学)「アメリカ障害児教育事情」

第2回研究会、11月12日、13日。大宮とも子、黒川陽司(神戸大学附属特別支援学校)「高等部Aさんの事例」、別府哲(岐阜大学)「行動障害の理解と支援」、吉岡ちなり、山添博史(あみの福祉会)「学校卒業後の自閉症」、赤木和重「行動障害の理解と支援」、國本真吾(鳥取短期大学)「自閉症におけるキャリア教育の批判的検討」

第3回(公開研究会、神戸市立勤労会館。80名参加)12月11日。基調報告、越野和之、実践報告(1)「小学校特別支援学級における自閉症児の授業づくり」篠崎詩織、実践報告(2)「自閉症児の理解と授業づくり」木澤愛子、シンポジウム。この他に、特別支援学校教員への聞き取り調査、出版に向けての執筆者会議を適宜行った。

(3)最終年度 (2017年度)

第1回研究会、7月16日、17日、三木裕和「『資質・能力論』と障害児教育-学習指導要領改訂との関連」、石田誠「改訂学習指導要領にどう臨むか」、原田文孝(元兵庫県立いなみ野特別支援学校)「この子と歩む~今

日も一日”おつかれさん”」、澤田淳太郎(鳥取大学附属特別支援学校)「高等部専攻科『お笑い』の取り組み」、出版に向けての執筆者会議

第2回研究会、11月3日、4日、報告(1)TV番組「みんなの学校」視聴、および合評、指定討論：大島悦子(大阪市立高倉小学校)、越野和之、「障害児教育の教育目標・評価に関する研究、まとめに向けて(出版第1巻を念頭に)」三木裕和、「障害児教育の教育目標・評価に関する研究、まとめに向けて(出版第2巻を念頭に)」

第3回(公開研究会、鳥取大学、60名参加)大島悦子「友だちが心に灯った時『ごめんなさい』のことば」

以上のように、共同研究会を基礎に研究を進め、当初の予定を終了した。

4. 研究成果

特別支援学校、および福祉作業所における実践を学校教員と研究者の共同研究で検討し、研究者からの問題提起を受けて集団的な討論を重ねた結果、次のことが明らかになった。

自閉症教育において行動変容を重視する傾向が広く見られるが、教科学習、特別活動などで、教材本来の持つ教育的価値が吟味され、授業づくりが旺盛に試みられていることが確認された。自閉症のある児童生徒が友だちや教師との共感関係を基礎に文化を取り入れ、「人と共鳴し共感すること」「創造的に考えること」が授業の中で成立している事実が認められた。

また、知的に重度とされる人たちの「強度行動障害」は1歳半頃の発達の節目との関連が大きいこと、学校教育でこの観点が弱く、時間的空間的構造化による行動上の適応性を求める傾向が強いことなどが分かった。自己の感情や意図を対象化することにおいて、自閉症固有の困難があるものの、共感的情動体験を共有することが大切であり、授業の価値はそこにあることが確認された。

行動上の問題のみを特化して教育課題とし、行動変容のみを志向するのではなく、教材の教育的価値を重視した授業実践が重要であることが明らかになった。

3年間の研究期間を計画通りに終え、その研究成果を出版物として発行予定であり、広く障害児教育関係者に還元する。平成29年度で本研究は終了したが、この研究成果を引き継ぐ形で、新学習指導要領で提起されている「資質・能力論」について、知的障害教育、自閉症教育の教育目標・教育評価の観点から研究を行う予定である。なお、この研究計画は科研基盤研究(C)(一般)「知的障害、発達障害の教育目標・教育評価に関する研究-資質・能力論の観点から」として採択された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計42件)

(1)尾崎久仁香、三木裕和、小学校に在籍する自閉症スペクトラム症児の教育指導のあり方、鳥取大学地域学論集第14巻3号、査読なし、2018年、65-70

(2)澤田淳太郎、野波雄一、三木裕和、鳥取大学附属特別支援学校専攻科10年の成果と課題-修了生の悉皆調査から、人間発達研究所紀要、査読なし、第30号、2017年、62-78

(3)山本真帆、赤木和重、個別支援を必要とする児童に対する同学級児童の意識：他者からの受容感と授業面に着目して、神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要、査読なし、10巻2号、2017年、221-230

(4)中村明子、三木裕和、研究ノート：発達の視点から子どもをとらえる-9.10歳の発達の節目、鳥取大学地域学論集、査読なし、13巻1号、2016年、89-98

〔学会発表〕(計4件)

(1)三木裕和、鳥取大学附属特別支援学校における「自分づくり」の実践、日本特殊教育学会自主シンポジウム「自分づくり」を支援する教育実践の創造と展開、2017年

(2)川地亜弥子、学齢期の学力と発達を考える研究会、発達保障・学力保障と教育評価、2016年

(3)三木裕和、石田誠、小池えり子、越野和之、障害児教育の教育目標・教育評価を考える、発達保障研究集会、2016年

〔図書〕(計7件)

(1)鳥取大学附属特別支援学校、三木裕和、今井書店、七転び八起きの「自分づくり」-知的障害青年期教育と高等部専攻科の挑戦、2017年、210頁

(2)木下 孝司、川地 亜弥子、赤木 和重、河南 勝、クリエイツかもがわ、実践、楽しんでいますか？：発達保障からみた障害児者のライフステージ、2017年、217頁。

(3)赤木和重、岡村由紀子、金子明子、馬飼野陽美、ひとなる書房、どの子にもあ～楽しかった！の毎日を：発達の視点と保育の手立てをむすぶ、2017年、167頁

(4)古澤直子、塚田直也、石田誠、三木裕和、全国障害者問題研究会、子どもが笑顔になる学校、2017年、86頁

(5)川地亜弥子、発達保障と教育評価、中村隆一、渡部昭男編著、群青社、人間発達研究の創出と展開-田中昌人・田中杉恵の仕事をとおして歴史をつなぐ、2016年、119-130

〔産業財産権〕 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三木 裕和 (MIKI, hirokazu)

鳥取大学・地域学部・教授

研究者番号：80622513

(2) 研究分担者

川地 亜弥子 (KAWAJI, ayako)
神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授
研究者番号：20411473

寺川 志奈子 (TERAKAWA, shinako)

鳥取大学・地域学部・教授

研究者番号：30249297

山根 俊喜 (YAMANE, toshiki)

鳥取大学・地域学部・教授

研究者番号：70240067

赤木 和重 (AKAGI, kazushige)

神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：70402675

國本 真吾 (KUNIMOTO, shingo)

鳥取短期大学・その他部局など・准教授(移行)

研究者番号：80353100

越野 和之 (KOSHINO, kazuyuki)

奈良教育大学・学校教育講座・教授

研究者番号：90252824